

自治体が支援する6次産業化の取組み

—富山市におけるエゴマの6次産業化に注目して—

研究員 石田一喜

現政権の農業政策の基本方針を示す「農林水産業・地域の活力創造プラン」(2014年6月改訂、以下「活力創造プラン」)では、「企業のアイディア・ノウハウを活用した多様な事業者による地域資源を活用した地域ぐるみの6次産業化」の推進を目指している。

今回紹介する富山県富山市のエゴマの6次産業化の取組みは、地元企業4社の経営者等が共同出資して設立した農業生産法人(株)健菜堂が中心的な主体として役割を發揮していることから、この「活力創造プラン」の発想を先行的に実施している事例であるといえる。

また、この取組みは、自治体が積極的に支援していることが一つの特徴である。市が策定したエゴマの6次産業化を含む計画は、15年1月に「地域再生計画」に認定されており、今後の地方創生のモデルケースとしても想定される取組みになっている。

1 エゴマの6次産業化の経緯

エゴマは、シソ科の一年生植物であり、葉や種子にアレルギー疾患や認知症予防に高い効果を示す成分が多く含まれていることで、



エゴマの葉(富山市資料より引用)

大きな注目を集めている。しかし、日本国内においてこれまで大規模な生産が行われているところはなく、富山市が全国で初めて、大規模な生産および産地化を目指している。

第1表は、これまでの取組みの経緯を整理したものである。最初の契機となったのは、市が所有する牛岳温泉を指定管理受託していた(株)石橋の社長(現在、健菜堂の社長も兼任)による、温泉熱を利用した植物工場建設の提案である。

この提案は、12年5月に市が策定した「富山市環境未来都市計画」内の一部となり、市の事業として実施されていく。計画採択直後は、作付けする品目は決まっていなかったが、12年8月の「牛岳温泉熱等を活用した農業の6次産業化」プロジェクトチームでの検討で「エゴマの葉・実・油による一体的な6次産業

第1表 富山市のエゴマの6次産業化のこれまでの取組経緯

	内容
12年5月 8月	「富山市環境未来都市計画」策定 「牛岳温泉熱等を活用した農業の6次産業化」プロジェクトチーム設立
13年4月 4月～ 4月～ 7月	計画の中心となる「(株)健菜堂」設立 耕作放棄地等有効活用モデル事業実施計画調査開始 JA山田村を中心に「中山間特産物定着化業務」によって露地での試験栽培開始(～現在まで継続) 「えごま6次産業化推進グループ」設立
14年3月 4月～ 5月	旧山田村に植物工場竣工 植物工場での本格栽培を開始 内閣官房「地域活性化モデルケース」に選定
15年1月 3月 5月 6月 9月	「地域再生計画」の内閣総理大臣からの認定 健康サプリメント製造施設整備に対する助成 耕作放棄地の買入れ(20ha)、簡易整備の実施 リース用農業機械の購入 農地整備基本計画策定業務発注
16年1月～	エゴマ油を利用したソフトカプセル製造の開始(予定)

資料 富山市からの提供資料および公表資料

化」の方向性が確立している。その後、13年4月に、提案者である(株)石橋と地元の製菓企業、健康食品企業を含む計4社の経営者等の共同出資によって、健菜堂が設立されている。健菜堂は、エゴマ生産、加工に加えて、エゴマの利用や消費の振興も図っている。

その一つが、県内約80の団体・個人がエゴマの利用普及や消費の拡大について共同検討する場として、13年7月に設立された「えごま6次産業化推進グループ」の運営であり、健菜堂はグループ長となって、取りまとめを行っている。

2 6次産業化の流れと今後の課題

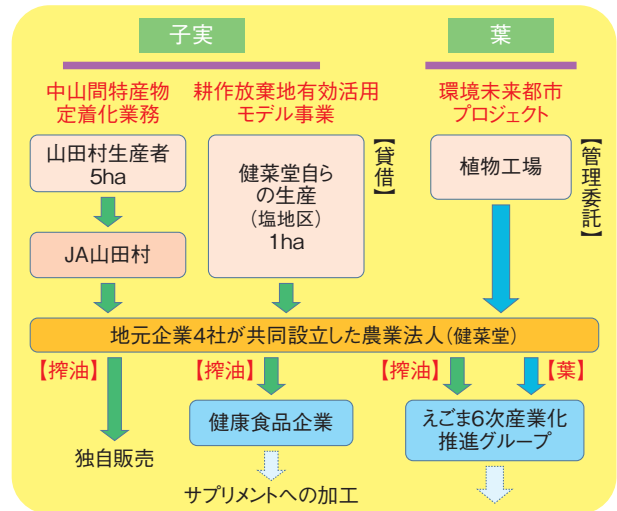
富山市でのエゴマ栽培は、露地での子実と植物工場での葉の生産に分かれており、子実、葉、両方の活用を目指している(第1図)。

露地での子実の生産は、植物工場が管内に立地しているJA山田村を通じて、13年4月から組合員による試験的な栽培が開始されており、生産面積と生産量を徐々に拡大させている。また、15年からは健菜堂自らが圃場を借りて生産を始めている。JA山田村管内で生産された子実は、健菜堂が全量を買取り、自らの生産分と合わせて搾油加工をしている。

一方、エゴマの葉は、露地栽培では独特の苦みが出てしまうため、植物工場のみで栽培されており、14年4月以降、市が所有する植物工場で、管理受託者である健菜堂が生産している。

葉と子実から搾油されたエゴマ油は、健菜堂独自の小売販売に加えて、県内の事業者に向けても販売されている。16年1月からは、健菜堂を共同で設立している県内の健康食品企業が、エゴマ油を注入したサプリメントの製造開始を予定しており、そこに向けたエゴ

第1図 富山市の6次産業化の流れ



資料 富山市「エゴマの6次産業化と今後の展開」
 (注) 健菜堂のエゴマ油の販売先としては、図中のほかに山田村特産加工組合がある。

マ油販売も健菜堂が担当する予定である。

こうして6次産業化の流れが確立し、利用範囲や販路が拡大していくなかで、課題にあがってきているのが、エゴマ油ひいては子実の生産量の確保である。現状でも需給がひっ迫しているなかで、サプリメントの製造が開始されれば、エゴマ油の需要量が供給量を上回るのは確実である。

もちろん、富山市も既にこのことを課題として認識し、対策に取り組み始めている。その一つが、富山市が購入した市内の耕作放棄地を圃場整備し、20ha規模の露地栽培用農地の確保を目指す「耕作放棄地有効活用モデル事業」である。また、市内の生産者等に新たにエゴマ生産を推奨することも検討している。とはいえ、急速に生産量を拡大することは容易ではない。行政や企業が主導し、販路が先に確立する6次産業化の取組みほど、このような原材料の不足が事業の問題にあがるようになってきている。今後の動向を注視していくことにしたい。

(いしだ かずき)